

# イベント指向データ管理手法を用いた系図表示 —付帯情報を表示するための前提と整理—<sup>¶</sup>

横澤 大典\*, 杉山 正治<sup>§</sup>, 生田 敦司\*, 柴田 みゆき\*, 松浦 亨\*\*

大谷大学文学部人文情報学科\*, 立命館大学情報理工学部<sup>§</sup>, 北海道大学病院\*\*

## 1. はじめに

系図を作成する際、その系図からより詳細な情報を得られるようにするため、各個性に付帯情報を記しておきたいという要求が一般的にあり得る。例えば個性の識別記号もその1つであり、他にも系図の用途にしたがって、様々な情報が個性に付記され得る。これは、日本の歴史的な系図史料においても同様である [1][2]。これまで我々は、コンピュータ上に系図を表示するシステムを検討してきた [3]。しかし、このような付帯情報の表示機能はまだ実装できていない。

そこで本研究では、日本の系図史料に見られる付帯情報の特徴を整理し、系図表示ソフトウェアに付帯情報を実装するための諸条件について検討する。

## 2. 付帯情報の概要

### 2.1. 内容

日本の系図史料に見られる付帯情報は、歴史学・系図学上は「注記」「尻付」などと呼ばれ [1]、個性名称や線分と共に、系図を構成する重要な要素の1つである。

図1は14世紀末(南北朝期)に成立した『尊卑分脈』[4]、図2は19世紀初(江戸中期)に成立した『寛政重修諸家譜』[5]である。これらは、多くの諸家系図を総合して編纂された大規模で代表的な系図史料である。その中には、個性名称以外に極めて多くの付帯情報が含まれている。

図1(a)は『尊卑分脈』のうち12世紀後半(平安末期)の朝廷で摂政・関白を務めた近衛(藤原)基実の記述部分を示したものである。また、図1(b)は、図1(a)図中(i)の部分拡大したものである。この例をはじめとして、系図史料に見られる主な付帯情報は、おおむね以下の内容にまとめることができる。

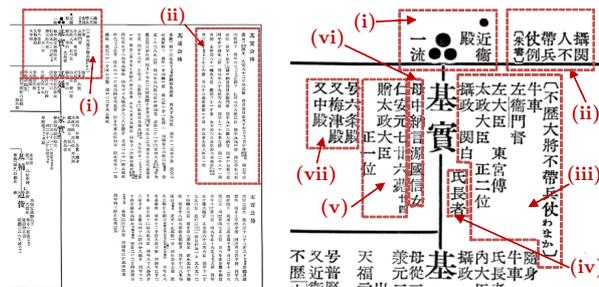
- 1) **家系:** 家系名称、識別記号など(図1(b)図中(i))
- 2) **経歴:** 官位、身分、没年、略歴など(図1(b)図中(ii)-(v), 図1(a)図中(ii))
- 3) **家族:** 母の出自など(図1(b)図中(vi))
- 4) **名称:** 通称など(図1(b)図中(vii))

<sup>¶</sup>Event Oriented Data Management Method: Displaying Genealogy with Annotation Data

\*Daisuke Yokozawa, Atsushi Ikuta and Miyuki Shibata: Otani University

<sup>§</sup>Seiji Sugiyama: Ritsumeikan University

\*\*Tohru Matsuura: Hokkaido University Hospital



(a) 近衛基実の付帯情報 (b) (a) 図中 (i) の拡大図

図1: 尊卑分脈(例1)[4]

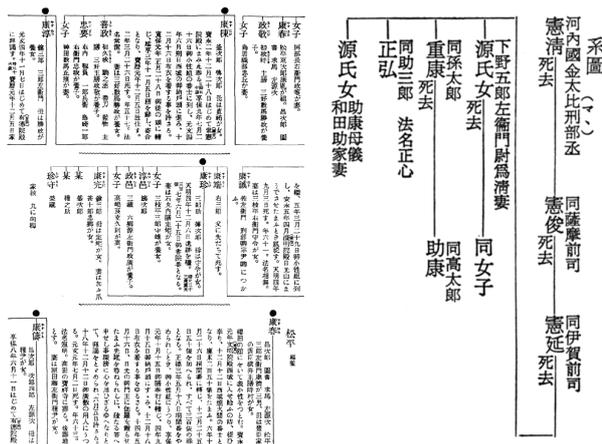


図2: 寛政重修諸家譜 [5] 図3: 金太助康系図 [6]

これらの付帯情報の記載順序や記載位置は、不規則で錯綜していることが多く [2]、必ずしも特定の情報が特定の位置へ記載される訳ではない。

『尊卑分脈』や『寛政重修諸家譜』は、同じ出自の同族関係を示した系図であるが、この他、所領の伝領関係を示すなど特定の目的で作成された系図も存在する。この場合、系図の作成意図にあわせた付帯情報が付されることもある。

例えば、図3の系図は、鎌倉末期、和泉国の鎌倉幕府御家人金太助康が、養父重康から継承した遺領の安堵を幕府へ申請した際に添付したものである [6]。この系図は、養父重康の近親者で、助康の遺領継承に対して何らかの請求を行い得る人物を識別できるように作成されたと考えられる。そのため、この意図にしたがって、請求の権利を持たない故人には「死去」との付帯情報が記されている [7]。

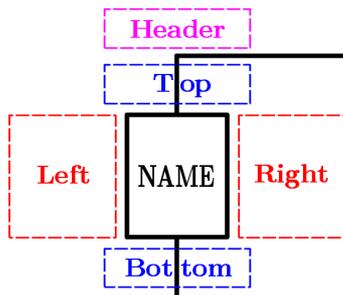


図 4: 尊卑分脈 (例 2)[4] 図 5: 付帯情報の模式図

## 2.2. 文字サイズと配置

系図史料の付帯情報は、図 1–図 3 の例から明らかのように、通常、個性名称との区別を明確にするために 1/4 倍角程度の小さい文字サイズで記されている。

これらの付帯情報は、個性名称の上下左右の周囲に、線分と重ならないように配置されている。図 1(b) によって具体的にその場所を見てみると、個性名称の左右両側や右下、個性の親に繋がる線分が分岐する箇所の上などなどに置かれている。また、図 4 は『尊卑分脈』から 10 世紀後半 (平安中期) に摂政・関白を務めた小野宮 (藤原) 実頼の記述部分を抜き出したものである。この例では、個性名称の右上や下にも情報が記されている。さらに、図 1(a) 図中 (ii) のように個性名称から離れた場所に、略歴などの長文を記載する例もある。

## 2.3. 意味

付帯情報の存在により、詳細に人物の情報が得られる他、家系全体から見た嫡流 (家督継承者の流れ) の所在や分家の状況、世代間における身分経歴の変遷など、氏・家系に付随する様々な情報が得られる。また、系図の作成意図に沿って記された情報を受け取ることができる。同時に、個性間の関係および各個性の情報を、同一の紙面で 1 つの図像として視認できる。

さらに、付帯情報として母の名や出自を記すことにより、複数の家系との婚姻関係を線分を用いずに表現している。これは、『尊卑分脈』が線分の屈曲を伴う複雑な横系図でありながら、線分交叉が発生しない木構造を持つことのものである。

## 3. 付帯情報の表示

### 3.1. 方法

コンピュータ上で作成した系図に付帯情報を反映させようとする場合、従来の系図表示ソフトウェアでは、別ウインドウないしパルーン機能を使用してこれを表示するのが一般的である。しかし、これらの機能による限り、系図表示の一覧性は損なわれ、系図史料の様式にも近づけることができない。また、複数の個性の付帯情報を見るには、それぞれの個性について表示切

替操作を行う必要があり、操作手順の上でも煩雑とならざるを得ない。

以上の問題点を回避するためには、1 つの画面上で、線分と重ならないように個性名称の周囲へ付帯情報を表示させなければならない。さらに、付帯情報は個性に付随して入力・管理されることが必要である。また、個性の配置が変更された場合でも常に個性と一体となって座標が管理される必要がある。

### 3.2. 配置

2.2. で述べた系図史料の配置例を集約すると、付帯情報の配置は以下の 5 つの領域に分類できる (図 5)。

**左部 (Left), 右部 (Right):** 個性名称枠 (NAME) の左側・右側にあたり、それぞれ個性名称に寄せて記される (図 1(b) 図中 (v)(vi)(vii), 図 1(b) 図中 (iii)).

**上部 (Top), 下部 (Bottom):** 個性名称枠の上側・下側にあたる。上位・下位世代に繋がる垂直線分が存在する時には、その線分の左右に記述されるか、あるいは中央を線分が貫いている形で記される (図 4 図中 (i)(ii), 図 1(b) 図中 (iv)).

**冠部 (Header):** 個性名称枠から親へ繋がる線分が屈曲・分岐する箇所の上にあたる。この部分には、一般的な付帯情報の他、その個性から派生した家系の付帯情報が記されることも多い (図 1(b) 図中 (i)(ii)).

## 4. おわりに

以上、本研究では、系図における付帯情報の整理と検討を行い、その配置が個性名称の周囲の 5 つの領域に集約できることを示した。今後は更に諸系図の調査と検証を継続する。また、個性名称枠から離れた場所の付帯情報について検討を行う予定である。

## 参考文献

- [1] 近藤安太郎, “系図研究の基礎知識 第 1 巻 序章・古代中世 1”, 近藤出版社, 1989
- [2] 相田満, “日本古典系図データベースの構築”, 人文科学とコンピュータ, CH51(6), pp. 39–46, 2001
- [3] S. Sugiyama, A. Ikuta, M. Shibata and T. Matsuura, “A Study of an Event Oriented Data Management Method for Displaying Genealogy: Widespread Hand to InTERconnect BASic Elements (WHIteBasE)”, IEEE Int. Journal of Computer Information Systems and Industrial Management Applications (IJCISIM), Vol. 3, pp. 280–289, 2011
- [4] 黒板勝美・国史大系編修会編, “新訂増補国史大系 尊卑分脈”, 吉川弘文館, 1980
- [5] 高柳光寿・岡山泰四・斎木一馬編集顧問, “寛政重修諸家譜”, 続群書類完成会, 1964
- [6] 竹内理三編, “鎌倉遺文 古文書編 第 35 卷”, 27446 号文書, 東京堂出版, pp. 351, 1988
- [7] 青山幹哉, “中世系図学構築の試み”, 名古屋大学文学部研究論集 史学, No. 39, pp. 145–159, 1993